



子どもたちや地域を込める表情の校舎北側外観

令和7年度日事連建築賞受賞作品紹介

優秀賞(一般建築部門)

日上市立中里小中学校

(株)三上建築事務所

茨城県

文・金子一彦

由緒ある日上市の飛び地 ——地域の立地と歴史

日上市は茨城県東北部の海沿いに位置し、日立鉱山を起源とする日立製作所の発祥の地として知られている。阿武隈山地南端の山々の裾野が海まで続く、太平洋を望む街である。そのような日上市にあって中里地区は、かつて銅山があった高鈴山の峠を越えた山間の飛び地のような場所である。

久慈川支流の里川が流れ、1908(明治41)年には日立銅山に送電するために茨城県最古の水力発電所・中里発電所が造られた。日立銅山の公害問題を描いた新田次郎の小説『ある町の高い煙突』の舞台となった入四間も地区内にある。

もともとは久慈郡中里村であったが、1955年の昭和の大合併の際に民意によって日上市に編入された。日立銅山等の労働者住宅が所在したことなどから、同じ川筋の常陸太田市よりも日上市との関係が強かったことに起因している。

今ではその銅山もなくなり、中里地区は過疎化・少子高齢化が進行する寂れた山里となった。

過疎化・少子化の解決と新たな教育の場の企画 ——計画の背景

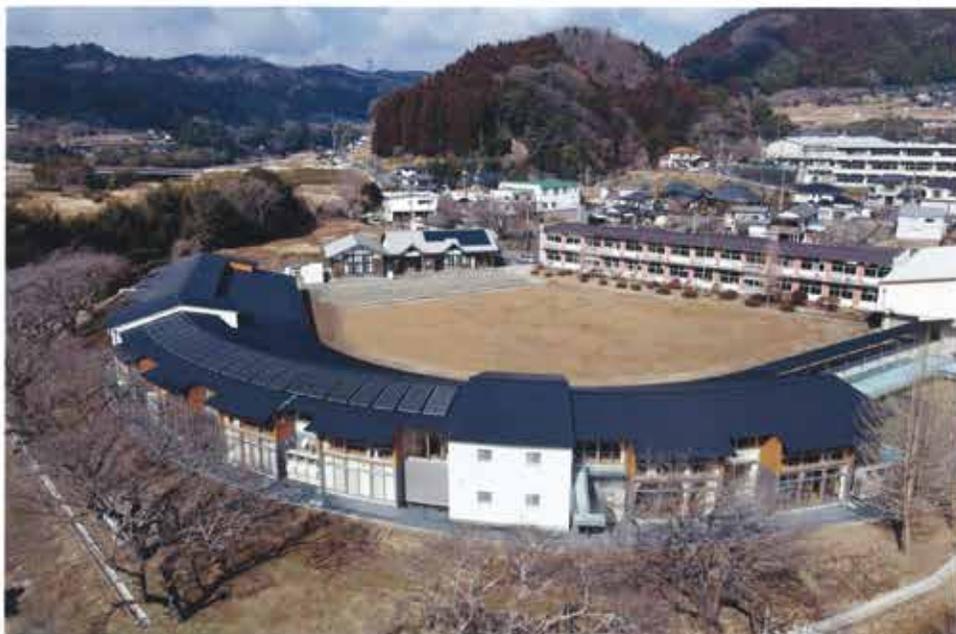
それまで別々にあった小学校と中学校が統合し、小学校1年生から中学校3年生までが一緒に過ごす義務教育学校・中里小中学校というひとつの学校とすることとなった。それでも、1学年の子どもの数は10人程度に過

ぎず、しかも中里地区だけではその数を満たせない。

地区が常陸太田市に食い込むように立地すること、少子化が進む地域の学校を維持することから、日上市の中で特殊な学校となった。

前身の中里小学校・中里中学校ともに、以前より英語や言葉の教育に力を入れ、また地域との積極的な交流など、少人数の学校であるが故に実現できる特徴的な教育が行われてきた。そうした魅力的な教育内容と山間の自然豊かな環境とを活かして、日上市全域から子どもを呼び込み、学校が中核となって地域を支えることが企図された。

開校後数年を経過した現在、大多数の子どもたちが海沿いの市街地からバスで通学している。



桜並木に沿って弧を描き、山麓に広がる集落を囲い込む校舎(奥に見える校舎が既存校舎)。



配置図



特別教室を拡張することができる異学年交流・地域交流を図るマルチスペース

里川の流れと桜並木 —敷地の特質

中里地区は、福島との県境を源流として常陸太田で久慈川と合流する里川流域の中で、東西の山が最も迫る溪谷である。敷地はその里川が蛇行して生まれたわずかな平地で、かつて中里中学校であった場所である。その運動場の外側には、西から南、南から東へ大きな弧を描くように里川が流れ、その流れに沿った敷地境界線に桜の古木が立ち並んでいた。

そのロケーションを活かして、この場所ならではの小さな学校を具体化することにした。

弧を描く校舎 —配置計画

新しい校舎は既存の中学校校舎を使用しながら建設することが前提であった。その要件を満たすために、既存

校舎から最も離れた位置に、桜並木に沿って大きな弧を描くように、新校舎を配置することにした。

校舎の構成は横に長い中廊下型である。けれども、大きな円弧上に配置することによって校舎内の見通しは限定的なものとなる。各ゾーンに生まれる囲まれた感じを醸成しながら、教室同士の緩やかなつながりを創ろうとした。

子どもたちをつなぎ、地域をつなぐ —平面計画

全ての教室は、南を向く円弧の外周に設けた。そうすることで、全ての教室が春には桜に包まれる。そして、その先には里川が流れ、晴天のせせらぎの音も荒天の濁流の音も教室に届く。対岸の南側の山々も手の届くほど近い距離にあり、草木のざわめきも季節ごとに色味を変える木々も教室に取り込まれる。天気の流れいも、四季の変化も、豊かな自然として感じることができる。



子どもたちを昇降口まで導く軒下空間(左)、円弧を描きながら連結する教室と適度な距離感を保つ2階学年ゾーン(右下)、方杖を設けて8mのスパンを垂木のみで架け渡す小部屋(右下)



この学校ができる以前から小学校と中学校は互いに連携し合い、幅広い年代の子どもたち同士の交流とともに、学校と地域の人たちとの密度の高い交流が図られてきた。また、英語・国語の学習を通して、人間関係の構築や自他を尊重する環境も整えられていた。そうした従来の慣習を発展的に継承できる環境の形成に努めた。

普通教室は2階に設け、小学校低学年・中学年・高学年・中学校と4つのまとまりを形成した。9つの教室を円弧上に少しずつ向きを変えながら並べ、季節の移ろいに伴って変化する舎意の景色が、さらに学舎とともに少しずつ変化するように構成した。また、2つの学年の教室の間に多目的スペースを設けて隣り合う学年同士が連携するようにしながら、2学年ごとに階段を設けて緩やかに学舎のスペースが区分されるようにした。

1階にはこの学校の中心空間としてマルチスペースを設けた。このマルチスペースを中心に、演奏コーナー・創作コーナー・実験コーナー・調理コーナーを配置し

た。それぞれの教室をマルチスペースに開放できる可変性を備えて、授業展開に応じて教室を拡張できるようにしている。

休み時間には、全校の児童・生徒が寄りつき、異学年の交流を促す広場のような場としている。同時に、地域の方々との交流を育む場として、学校が地域の中心としての役割を果たせるようにした。

そして、円弧状の校舎の内側は、芝巻りの運動場を囲む。この学校が地域に開かれ、毎朝子どもたちを迎え入れるような様相を創り出した。

中里の自然を反映する木造校舎 —構造計画

主たる構造は木造とした。小さな学校が里山の風景と調和することを意図したものである。しかも集成材による大スパンの架構ではなく、無垢材による在来構法木造を採用した。地域文化を継承しながら、子どもたちが木



地域を打す校舎の灯り



外部の自然と呼吸する木質の内装の教室
写真撮影(★以内) 堀内広治

のぬくもりに包まれる中で生活・学習できる空間とするためである。けれども、単なるノスタルジーに陥ることなく新しい合理性を加味している。

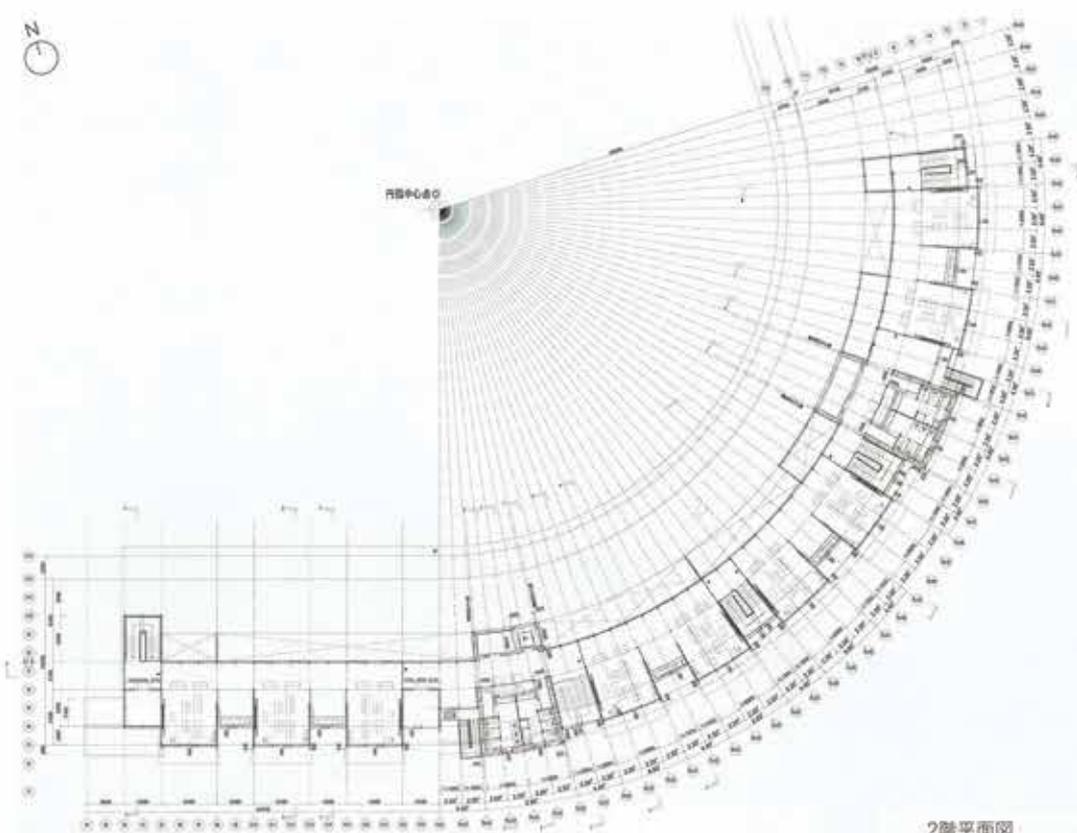
木造の法令を満足させるために1,000㎡ごとに2つのRC造の構造体を挿入し、5つの構造体で構成した。RC造部分を防火区画のための耐火構造とすると同時に、耐震要素の役割を担うものとした。また、木造の小屋組みには梁や母屋等の横架材をなくし、集成材の垂木のみで屋根架構を構成している。その垂木は方杖で支持する丸太の中間桁によって掛け渡しを短縮して、断面寸法を小さくできるようにした。

三上建築事務所

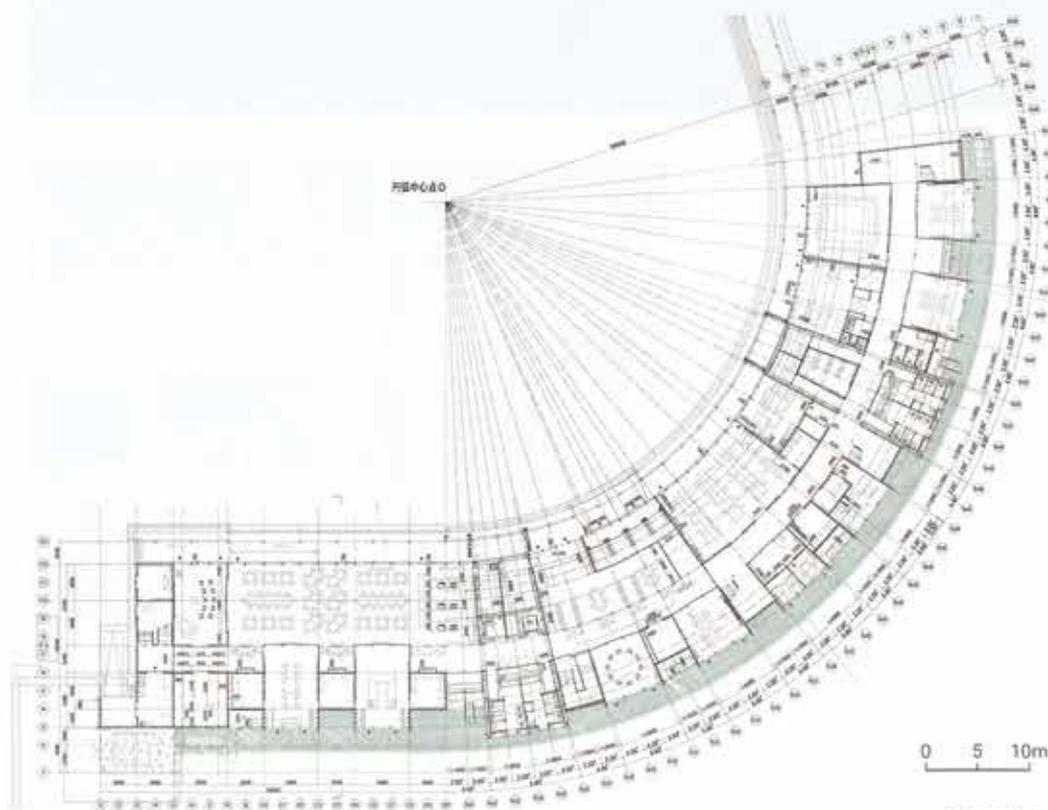
三上建築事務所は2024年に創業90周年を迎えた。私は3代目の代表者である。茨城県水戸市・東京都台東区・佐賀県佐賀市に拠点を置き、35人のスタッフを擁して全国で建築活動を展開している。「よりよい建築

を！」をモットーに、現状に満足することなく常に挑戦し続け、洗練よりも成長を目指して創作に取り組んでいる。

2025年には中国遼寧省大連市にも拠点を設け、新たな活動の展開を予定している。



2階平面図



1階平面図

プロフィール



益子一彦

ましこ・かずひこ
 1959年茨城県生まれ。83年武蔵工業大学工学部建築学科卒業後、三上建築事務所に入所。2001年同所副所長に就任。05年同所代表取締役所長に就任。主な作品および受賞に、砺波市立砺波図書館(2020年/ADFデザインアワード2023最優秀賞、2021年度JIA優秀建築選100作品)、下妻市立下妻中学校(2018年/令和2年度日事連建築賞奨励賞)、安城市図書館情報館・アンフォーレ(2017年/第37回日本図書館協会建築賞)、矢祭町立矢祭小学校(2016年/第19回公共建築賞地域特別賞)ほか。

建設地 茨城県日立市
 用途 義務教育学校(校舎)
 構造 木造、一部RC造、S造
 階数 地上2階
 敷地面積 15,030.17㎡
 建築面積 2,069.02㎡
 延面積 2,839.70㎡